

# Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：富樫茂美

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 サノバビル 5.6F

03-3359-7611 (Tel) 03-3355-1462 (Fax)

<http://www.genken.ac>

[jimukyoku@genken.ac](mailto:jimukyoku@genken.ac)

責任編集 金瀬 胖

禁無断掲載 許可なく作品の使用はしないでください。

spring 2023・4.20 NO.13 新春コンテスト入賞作品&講師からのメッセージ



「Nostalgia」より千葉・出津海岸 2023年3月 金瀬胖

上の写真もそうだが、思わずカメラが向いてしまうものがある。その時いいと思った写真は意外とフツーだったりすること多い。世の中の、街の擦りキズのようなものがどうしても写り込んでしまうのは私の性癖で、これは多分なおらない。このところ正面からズバリ撮るようにしているが気分が変われば撮り方も変わるかもしれないが、すこし続けようと思っている。

沢山の写真から選んでいると、写真が「これだけは捨てるな」と言いたすことがある。よく考えるとそれは失敗かどうかとか、いいか悪いかではなくて記憶に関連している。記憶とは忘れようとしても忘れえないことなのだが、写真は記憶の確認以上に、忘れてしまったことや無くしていた感覚を呼び覚ましてくれることがある。それは懐かしさであるかもしれないが、いままで自分には無かった感知力、視力が写真を撮るうちに生まれているのだ。「写真の量」には意味がある。

写真という記録、記憶、記憶は誰もがみることができるもの、肉質のあるプリントや印刷にしておくことはとても大切である。写真がデジタル装置の中にあるようになって自分が鑑賞できればよいものになると、記憶、記憶は共有されなくなり、わたしたちは「記憶なき民、歴史なき民」になりかねないから。もうすぐ現研は50周年、沢山撮りましょう。金瀬胖・教務主任



コロナあけの春休み 2023年3月習志野市

## contents

- |           |           |
|-----------|-----------|
| 2- 英 伸三   | 3- 二階良子   |
| 4- 長谷川 啓一 | 5- 赤松ともい  |
| 6- とみたやすよ | 鬼塚紀子      |
| 7- 生田一美   | 8- 宮原咸太郎  |
| 9- 清水靖子   | 関雅之       |
| 10- 亀井正樹  | 11- 山本やす子 |
| 12- 尾辻弥寿雄 | 13- 金井紀光  |
| 14- 入江 進  | 15- 宮本遼   |
| 16- 宮本壽男  | 17- 田沼洋一  |
| 18- 金瀬 胖  |           |



## 街角の出会い 英伸三

写真を撮る面白さは、暮らしや街角、旅先で会うちょっとした光景から感じられるものです。作品①「雨の交差点」は、ある日夜遅く帰宅途中に土砂降りにあい、ひさしの下で雨やどりしていると、交差点横の歩道にとめられた十台あまりの自転車が、激しい雨に打たれているのが目に入りました。それがまるで違法駐輪を罰しているように見えたので、持っていたカメラをバックから出して構えていると、信号が赤に変わって JR 夜行バスがすっととまった。その一瞬、8分の1秒のシャッターで捉えたのがこの写真です。自転車の静に対してバスの動、車体に描かれたつばめマークが流れている対比が面白いと思います。バスが青信号で走り去っていたらこんなふうには写らなかったのです。

作品②「歩く人形売り」は、上海の街角で見かけた人形売り。小さな子供ほどの人形を台車に積み、見本の人形の手を引いて歩かせながら売り歩く男性と、お手伝いさんに車椅子を押してもらって散歩中のおばあさんがすれ違ったところを捉えた写真です。思うように歩けないおばあさんが、歩いている人形を不思議そうに見ています。前からは人形とわかるのですが、後ろからだときちない足の運びがまるで小さな女の子のように見える、これが写真のマジックであり、面白さなのだと思います現研で写真の腕を磨き、もっともっと写真の楽しさを味わってください。

①②ともカメラはライカ M6、トライ X





2023 新春コンテスト準特選  
「新年のしるし」 長谷川啓一  
尾辻ゼミ在籍



2023 新春コンテスト入選  
「ノケモノたちの夜」 赤松ともい  
フォトジャーナリズム専科在籍



2023 新春コンテスト入選  
「感動の聴衆」 とみたやすよ  
日曜撮影専科在籍



2023 新春コンテスト入選  
「帰宅の群れ」 鬼塚紀子  
飯塚ゼミ在籍



2023 新春コンテスト入選  
「行きかう」 生田一美  
飯塚ゼミ在籍



2023 新春コンテスト入選

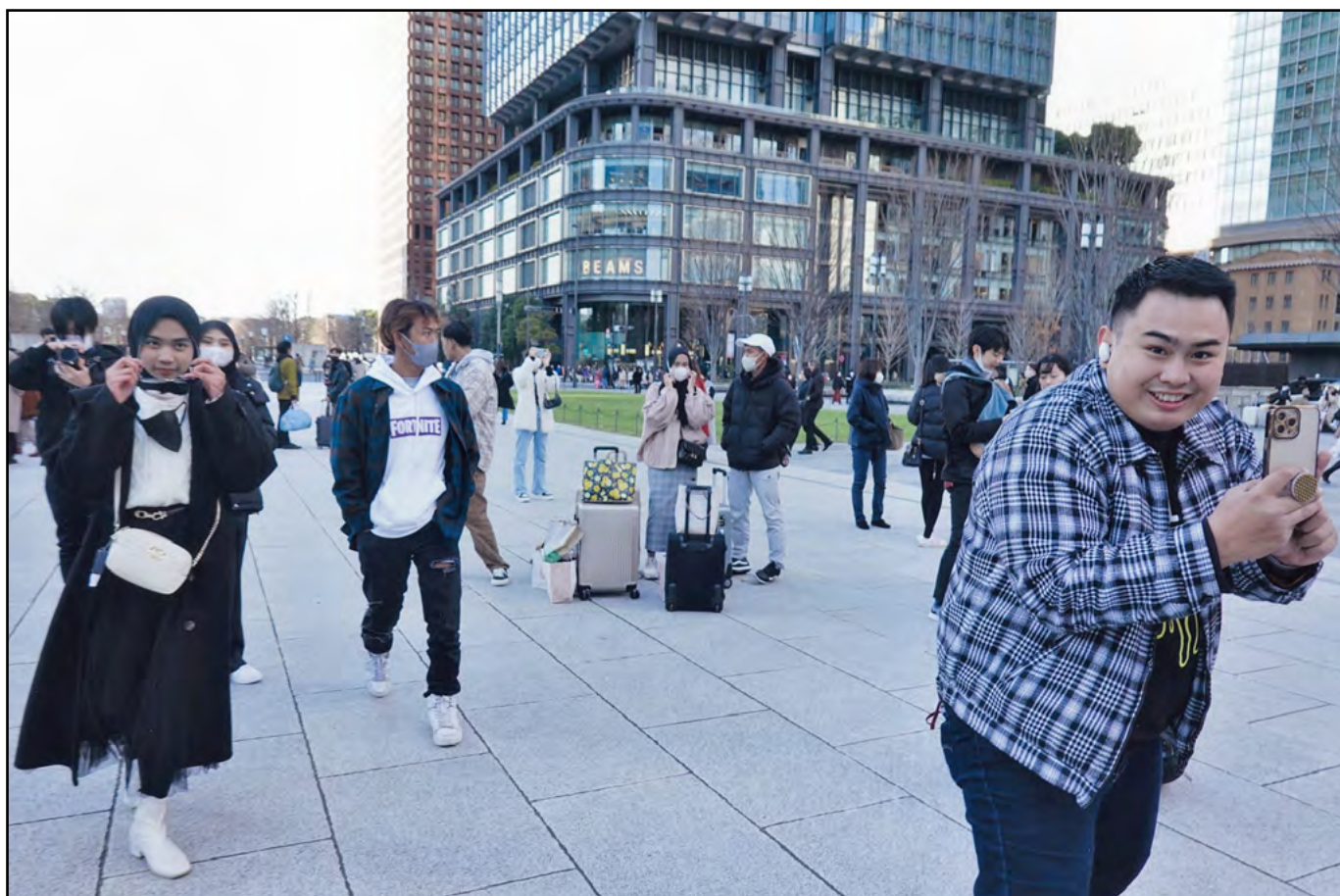
「ばあちゃんを想う」 宮原成太郎

オンラインワークショップ研究科・金瀬ゼミ在籍





2023 新春コンテスト入選  
「浅草育ちの母娘三代」 清水康子  
デジタル研究科4・入江ゼミ在籍



2023 新春コンテスト入選  
「東京駅前広場で日本を撮る」 関雅之  
日曜撮影専科在籍



iron Lady (鍛冶アーティスト) Nana

Nanaと知り合って十数年。ダマスカス鋼での作品を作る彼女を撮り続けています。小柄な体型ながら赤く溶けた鉄の塊を炉から取り出し、全体重をかけてねじり、叩き、高熱との闘いのなかで彼女自身のイメージが作品へと形成されていきます。

私は、仕事での撮影ではクライアントとの関係でデジタルカメラを使っていますが、プライベートな創作活動では今も銀塩モノクロフィルムを用いています。工房は薄暗く、デジタルカメラで撮影するのが得策であるとわかっていましたが、私は躊躇なくフィルムカメラを選びました。

私たちの Monochrome Film Workshop のクラスではフィルムカメラを用いた撮影から暗室での現像処理、プリントまでの工程を自らが体得して、写真を作りあげる楽しみを学びます。このように光量に乏しくフィルム撮影に不利な条件下でも撮影方法や現像処理の過程で補う方法も教えます。

一般的な35mmフィルムカメラや中判カメラ、より大きなフォーマットである大判カメラなど撮影目的や表現方法に合わせた機材を紹介しながら暗室では全倍プリントまで対応することができ、その成果を発表する修了展も行っています。

亀井正樹 (MFW担当)





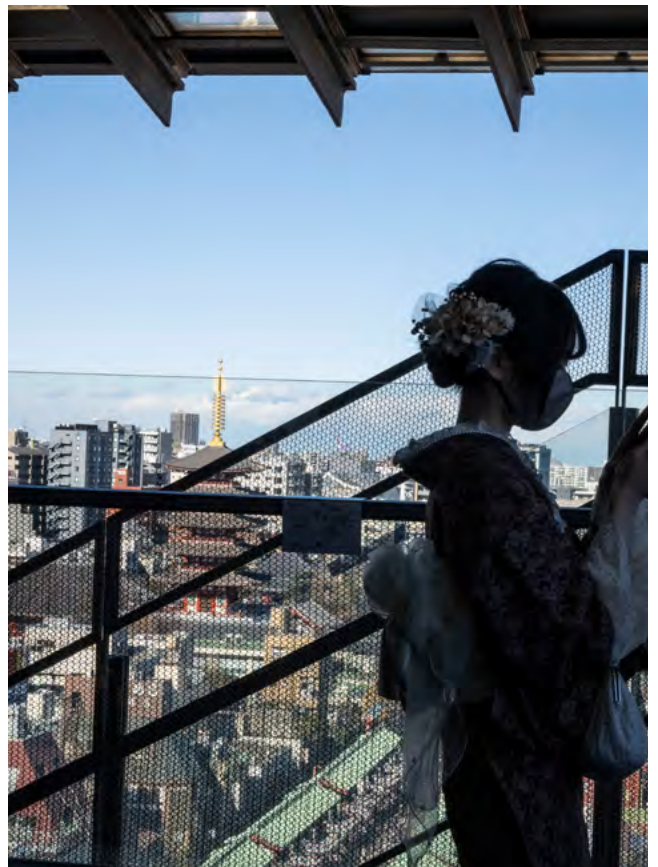
### 山本やす子（ゼミ担当）

浅草に行ったらまず雷門のはず向かいの観光案内所のビル展望階へ。

仲見世・参道の込み具合を確認、さて出かけようと思ったら着物姿の人たちが入ってきた。

展望台ではみな記念写真を撮るから私も横からシルエット気味に1枚！誰になんの遠慮もいらず自分の好きなものを見つけてはシャッターを切る。

撮れない！と思うときもあるが、帰って映像を見返すのが楽しみ。





横浜市 2022



長崎市 2022

## 「街景Ⅰ 美しいというのかも」

尾辻弥寿雄 (総合科・ゼミ担当)

街の光景は、自然が生み出すものと違って人間の頭で考えだしたものが多い。都会には空が無いというので、空もどきの空間を作り出す。そこには自然では決して出現しない光景がさも自然のように存在する。南国でもないのに椰子の木やバナナを植え、アクリル板だけでは面白味がないとステンドグラスもどきで色を付ける。しかし、時間の経過とともに自然は自分のルールで美しさと面白さを演出するのである。いつの間にかバナナの木は枯、アクリル板の雨除けには草が植わっていた。しかし、そのちぐはぐさが都会の自然な光景なのだろう。



2021年8月国立競技場周辺。

「あの夏の日—東京 2020」  
金井紀光（ゼミ担当）

「写真への誘い」

身に付けた写真技術で、目の前の世界や自分の思いを表現できることは、とても愉快的ことです。一緒に探究しましょう。



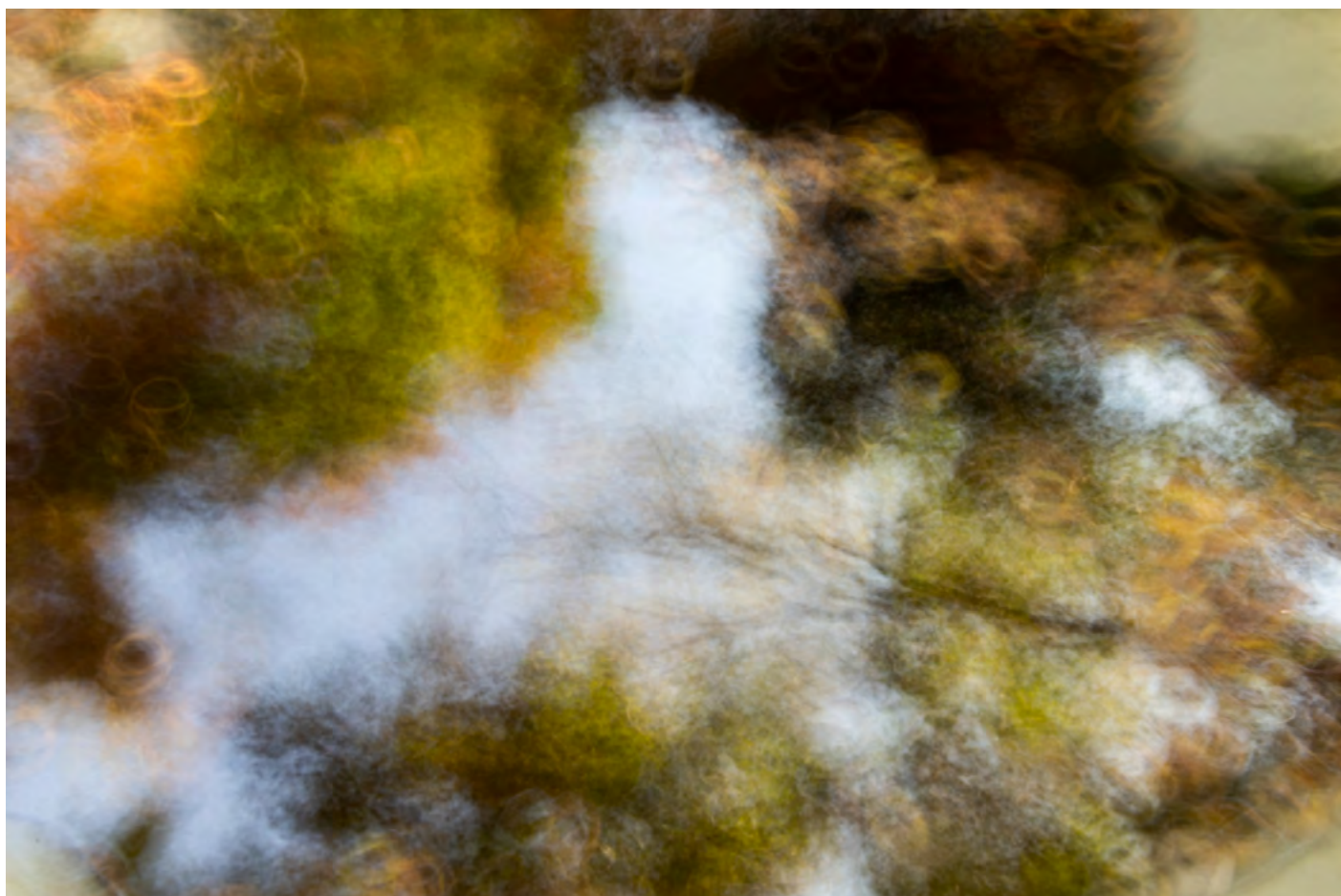
入江進（ゼミ・デジタル基礎講座・ライトルーム専科・デジタル研究科担当）

#### 絶滅危惧種

オオワシが絶滅危惧種に指定されているひとつの原因は、猟銃による鉛の使用があげられます。猟銃に使用される鉛弾は、命中した動物や鳥類の体内に蓄積され、鉛中毒を引き起こすことがあります。オオワシも、狩猟を行う際に鉛弾を食べることがあり、その結果、健康被害を引き起こすことがあります。また、狩猟で倒された獲物の体内にも鉛が蓄積され、それを食べるオオワシの健康被害を引き起こすこともあります。現在、猟銃の鉛規制は進んでいますが、完全ではありません。生物の多様性や環境を保護をすることは人間の未来をも考える上で重要だと考えます。

#### 表現手段としての写真

写真は、記録や記憶の手段にとどまらず、様々な感情や思考を表現することができます。私たちは、写真が持つ表現力を最大限に引き出すための技術や方法を学び、より深い思考や感情を伝えることを追求したいと思っています。一緒に学び、悩み、考え、自己表現の可能性を広げていきましょう。



宮本遼（総合科・オンラインワークショップ・写真基礎ワークショップ担当）

「IZUの風景 - 川」

生徒さんへのメッセージ ----

まずは、写真を楽しんで、そして、一緒に少しずつ自分の中にあるものを発見していきましょう。



宮本壽男（オンラインワークショップ・写真基礎ワークショップ担当・日曜撮影専科在籍）

コロナをきっかけに始まったオンライン授業、2年を経て運営面のノウハウや環境面も十分整ってきました。オンライン授業の特長は特に地方在住で現代写真研究所に通うことが困難な方々でも自宅で授業を受けることが可能なことです。オンライン授業らしく、Youtubeや独自に立ち上げたオンラインギャラリーでの作品発表も行っています。パソコンの操作方法も授業の中に取り込んでおり、パソコンが苦手な方でも問題なく授業を受けることが出来るようなカリキュラムになっています。オンラインで写真の勉強をしてみたい、いろいろな人の写真を見て刺激を受けたいと感じている方は6月に新しく開講するオンラインワークショップ写真講座をぜひ受講してみてください。





街・まち・東京 悩む人 千代田区神保町 2022年6月撮影



街・まち・東京 お地蔵さん 板橋区西台 2022年1月撮影

田沼洋一 あなたの気持ちを 想いを伝えよう 写真で表現しよう



オイル 船橋漁港修理場 2023年3月

金瀬胖（ゼミ・日曜撮影専科担当）

200年前、ニエプスがフランスのサン・ルゥで人類初めての写真の定着に成功して「heriogurafy」（太陽で描く）と名付けました。ついでタルポットがネガ・ポジ法（カロタイプ）を発明し複製が可能となり、早くも1844年、世界で最初の写真集『自然の鉛筆 pencil of nature』を200部発行しました。

「太陽で描く」「自然の鉛筆」はともに写真の本質を表しています。日本語でいう「写真」は中国で「真を写したもの」として「写真」と呼ばれたことに由来するとされています。

「自然の鉛筆」で思い起こすのは東松照明さんの『太陽の鉛筆』ですね。戦後日本の最高傑作という人もいますが、ぜひもう一度見てください。それに大いに刺激を受けた森山大道さんは「太陽で描く」のニエプスの写真の地への旅を繰り返し『サン・ルゥへの手紙』を著しています。彼の大作で妖艶で、光がよい。

いまや地球は映像のプラネット。大切なのは、写真の自由、身体的感応、そして何を撮るか、ですね。写真200年。これからどんな写真をはじめるか。